

(Japanese Academy of Learning Disabilities)



日本LD学会会報

第41号

事務局：栃木県カウンセリングセンター内

〒320-0851 宇都宮市鶴田町687-9 ムギショウビル2F TEL. 028-649-0090 FAX. 649-1213

URL. <http://wwwsoc.nii.ac.jp/jald/>

心理検査を作ること、使うこと

筑波大学心身障害学系

前川 久 男

この10数年の間にWAIS-R、K-ABC、WISC-IIIと大きな知能検査の標準化実験、分析にたずさわってきました。つまり人を評価するものさしをつくるようなものです。これは大変なことで、一歩間違えば多くの人を傷つけるものになってしまうものを作っているという認識でしたし、また現実にも多くの人に利用されれば利用されるほどその責任が毎日大きくなるという意味で緊張させられています。一方で、その検査が利用されることで子どもたちやその両親に役立つ情報がフィードバックされ、子どもの認知的改善に役立っていることがあればどんなにか幸せだと感じることもあります。カナダのアルバータ大学のJ. P. Das教授はLuriaの理論に基づく検査について「このモデルによる検査は、知的能力の検査ではなく、Luriaに従えば、我々はむしろ認知処理を検討するアプローチあるいは機会としてこうした検査をみなす」と述べています。単に知的能力の水準をみるものさしではなく、臨床的観察をす

る機会だと考えているのです。そのために必要なことは検査の背景にある理論と考え方をしっかりと把握することにあります。Zeigarnik、Luria、& Polyakov (1977)は「心理学の研究方法や心理検査は心理プロセスの構造とその損傷について基にある理論的仮説をもつて忘れるべきではない。各心理検査はそれ自体の理論をもっている。それ故、検査の背景にある理論を認識しないことは即座に幻滅につながり、時に大きな過ちにつながる」と述べています。このように心理検査の背景にある理論をしっかりと把握し、そこから子どもの状態を把握する機会として検査を利用することが要求されています。結果として、評価を受ける子どもにとっては、より妥当なダイナミックな見方から彼等の能力を評価されることから利益を得るとともに、先生や両親は認知的改善により本質的に関連した妥当なアドバイスを受けることにより利益を得ることになるのではないのでしょうか。